

昔話を追つて

—昔話の個別研究—

水沢謙一

一 はじめに

越後で長く昔話を追ってきて、今もフィールドの第一線にいる。私の昔話採集は、要約すると、つぎの三つの目的のためであった。

- ① 昔話の地域的研究（一地域）（全域）
ある一つの地域を選んで、その生活と昔話との関連を知ること。
- ② 昔話伝承者の研究（全域）
ゆたかな昔話伝承者の特色と、その持ち伝えている昔話の究明。
- ③ 昔話の個別研究（全域）
ある一つの昔話について、その類例を数多く集めての比較研究。

これら①②③は、たがいに関連しあっている。私の昔話の採集は、①からスタートして、②③に及んできた。今もこの三つを平行している。

結局は、昔話の民俗学研究であり、①②③を通して、昔話の語り形式、型（日本の型、世界の型）、伝承、伝播、機能、内在する民間信仰などを知ろうとしている。このたびは、とくに、昔話の個別研究のために、フィールドのかで感じた、研究上の要点などについて記したい。

シンデレラ型の「栗福・米福」、「糠福、米福」、「紅皿、欠皿」の

昔話のなかに、シュー・テスト（靴ためし、はきものためし）がある。お祭について帰るとき、急ぐあまり、娘が、たび、下駄、ぞうりなどのはきものを、片方ぬぎおいてくる話も、いくつもある。かつて、自分の思う人に、はきものを贈って、それを相手が受けとれば、恋愛や結婚が成立するという、はきものの民俗があった。これから、シンデレラ型の話に迫るもの、一つの道のように思われる。

3 夢のハチ

「夢のハチ」という昔話のなかで、もっとも美しいのは、眠った人の鼻（口からも）から、白い蝶の出入りする話で、つまり、「蝶になつた魂」である。眠っている人の、鼻（口・耳）の穴から、その人の魂が、虫（ハチ、アブ、ハエ、チョウ、アリ）になつて、抜け出る、古い遊魂信仰を秘めた話を、年来、採集してきて、百話をこえた。それを分類してみると、つぎのようになる。

- 一、遠く（近く）へとぶ（遠い町、近くの町）。
- 二、飲食する（酒、甘酒、餅、オハギ、マンジュウ）。
- 三、娘のところへ遊びにいく。
- 四、クサメとともに虫が出る（クサメと関連）。
- 五、人間の入れかわり（虫の入れかわり）。
- 六、虫をつぶすと人が死ぬ。
- 七、かながめを見つける（自分で掘る）。
- 八、かながめを掘る（他人が掘る）。
- 九、夢買長者（夢を買って長者となる）。
- 一〇、その他。

このなかで、とりわけ、四、五、六は、遊魂について、具体的に、確実に語っていて、異色で、分布が少い。五の人間の入れかわりは、

もっとも興味ぶかく、抜群の資料といえる。三人で山へいき、二人は眠り、一人は起きている。二人の魂が、それぞれ、ハチとアブになつて鼻から出て戻ってきたとき、穴ちがいをして反対に入る。ハチとアブが入れかわり、つまり、魂が入れかわって、人間も入れかわるという話で、三話。

眠っている人が、虫になつて抜け出る話ばかりさがしているうちに、火玉になつて、さまよい歩くのが十話ほど、出てきた。

さらに、生きている人の魂が虫になる（眠らずに）話も、一話だけあつた。また、死んだ直後の人の魂が、火玉となつて寺にいく世間話も、昔話もある。私が、とりわけ、力をいれてさがしもとめたのは、眠っている人の魂が、虫となつて、抜け出る昔話だった。

4 見るなの倉

「見るなの倉」や「見るなの座敷」や「ウグイスの一文錢」の昔話は、山中ふかく、一つの異郷を夢見た物語りで、異郷信仰をひそませている。この話には、どれもウグイスが登場して、その山中の異郷を、ウグイス浄土とよぶ。ウグイスのかくれ里ともよぶ。今夏、古志都二十村郷の九十二才の「老女」がウグイス浄土の話かのといて、「見るなの倉」を語つてくれた。

ウグイスは、山の神の使いだという。ウグイスの初音を右耳で聞けば上作、左耳で聞けば不作だというのも、ウグイスを通して神の声を聞こうとしているからだつた。山の神は田の神でもある。この「見るなの倉」のなかに、山の神の座のある話が一話あつて、深いナゾがとけた思いがした。「見るなのタンス」という話もいくつかあって、タンスのひき出しのなかに、苗代田や青田や秋田がはいつてゆいんがわかる。

「見るなの倉」という話のなかで、一つから十二までの倉があつて、そのなかに、膳や椀だけを入れておく膳椀倉がある。山中の膳椀から、木地屋を連想し、もししかすると、「見るなの倉」などの昔話の伝播に、木地屋の参与があつたのではないかと思つたりする。私の採集した「見るなの倉」の何十話に、かなり、膳椀倉が出てくる。

山中に異郷ありという幻は、「見るなの倉」、「見るなの座敷」、「見るなの花座敷」、「見るなのタンス」、「ウグイスの一文錢」の昔話ばかりではなかつた。これら、ウグイスの登場する話以外に、ウ

グイスの登場しない、「かくれ里」の昔話が、二話だけ見つかつてゐる。それは山の横穴深く、穴のなかにある別世界の異郷であり、山の神祕を伝えていた。この二話とも、二百話クラスのカタリバサ二人の記憶のなかに生きていた。

5 三枚の札

「三枚の札」は、子どもが聞いて喜ぶ昔話の一つである。本話の類例を数多く集めてみると、和尚と小僧が登場する話が、断然多い。まれながら、村の子どもが登場する話もあつて古い。

マジック・ライトといわれる本話は、三枚の札を投げて、山・川・

川・火をして逃げる話が、もつとも多い。たんに、ばかりか、櫛・玉もあるし、櫛とカンザシと針、櫛と手拭と札、櫛と手拭と鏡なども、少数ながらあって古く、貴重な昔話となつてゐる。類例を大きく分類して、つぎの二つとなる。

A 札などを投げて自分が変身して逃げる。

B 札を投げて山・川・火などの障害物を出して逃げる。

Aはきわめてまれで、越後で三話採集して以来、あとなし。Bは三

つにわかれで、B₁、B₂、B₃となる。B₁は和尚が札をくれる。B₂は便所神が札をくれる。B₃は山の神、地蔵などが札をくれる。さらに、このうちB₁が、さらに二つにわかれ、三枚の札を投げて山・川・火を出す話と、三枚の札のうち一枚を見代りに返事させ、二枚を投げて山と川、山と火、川と火を出す話となつてゐる。

なお、「鯖売り」その他の昔話に、三枚の札を投げて、山・川・火を出して、逃走する話も、まれながらある。

6 馬と犬と猫と鶏の旅

「ブレーメンの音楽隊」と、同じ一つの話である。昭和四十七年に、古志郡の山村で採集して以来、十話をこえている。本話は二つにわかれ、一つは、一けんのうちの馬・犬・猫・鶏が、銅われているうちが貧しくなつて、旅に出る。重なりあつてない、山賊のかねをとつて、主人に恩返しする話。もう一つは、別々のうちの馬・犬・猫・鶏が、老いてうちを追い出され、重なりあつて、山賊を驚かせ、そこに住むという話。遠い山かけの村や、野のはての村にも、語られていた。本話の、アジアにおける分布を知りたい。

7 犬と猫と指輪

昭和三十二年に、本話を採集して以来、ようやく、三十話近くとなつてゐる。荒木博之氏のいわれるよう、蛇サブタイプ、猿サブタイプ、竜宮サブタイプは、越後にも分布している。指輪、玉、ウチデノコヅチ、財布、サルの一文錢など、いろいろある。本話は、朝鮮、中国、蒙古、ソビエート、アフガニスタンなど、アジアの各地に分布しているのを知つた。

以上のはかに、個別研究として追つてある昔話に、運定め、竜宮竜子、味噌賈橋、木魂嫁入りなどがある。ある一つの話を採集しても、それは、その話の一つの姿にすぎない。そのさまざまな姿は、いったい、何による変化なのか、ここにも研究上の大きな問題がある。

ともかく、越後は、まだ、フィールドを歩いてはじめて知りうることが多い。フィールドの面白さはつきず、一兵卒のように山や野を歩く。

(みずさわ けんいち)